

十八世紀のカルティエ・ラタンと

哲学者エルヴェシウスの学生時代〈下の三〉

—— 評伝 エルヴェシウス家の人々（その十二）——

永治日出雄

第六節 コレージュ・ルイ・ルグランの教育と

哲学者エルヴェシウスの学生時代（その五）

—— 宗教教育とカテキスム ——

（一）

イグナティウス・デ・ロヨラとともにイエズス会を創設したピエール・ルフェーベルは、スペインとドイツで布教の旅を重ね、一五四三年古都マインツでひとりの学生と知り合った。この青年ベテル・カニシウスはケルン大学で神学を専攻し、聡明な精神と強い意志の持主として将来を嘱望されていた。ルター派の浸透と伝統的な権威の動揺によ

つて真摯なカニシウスも懷疑的になり勝ちであつたが、確信に満ちたルフエーベルの説教が彼に新しい生命を与える。大天使ミカエルの祝日であり、自身の誕生日にもあたる同年五月八日イエズス会への加入を決意し、清貧、純潔、服従の誓いを立てた。この朝を彼は第二の誕生日として銘記し、ルフエーベルを第二の父と呼ぶ。⁽¹⁾ こうした出会いと回心はケルンの友人に宛てたカニシウスの書簡のなかでつぎのように記述される。

マインツへ良い旅をして、求めていた人物に巡り会うという大きな幸福を得ました。その人が天使ではなく、実際に人間であるとしての話ですが・・・これほど学識豊かで深遠な神学者を、これほど輝かしく、神々しい人物を私は見たことも、聞いたこともありません。彼の願望のすべては魂の救済のためキリストに協力して働くことに尽きます。書きものをするときも、談笑を交わすときも、食卓に就くときも、彼の言辭は神で満たされ、聴く者を飽きさせも、疲れさせもしないのです。彼は絶大な信頼と名声を有しているので、宗教団体の多くの成員、沢山の司教と博士から精神生活の師匠や指導者として仰がれています。そうした人々のなかにはコクラエウスがいて、『心霊修業』への教導に際しては、いくら尽くしても報い切れない恩義を受けたと公言しています。〔中略〕自分について申せば、いかにして『心霊修業』が私の魂や感性を変え、天上の恩恵という新しい光で私の精神を照らし、清新な力と勇気を私のうちに鼓吹したかを、言葉ではほとんどお伝えすることができません。横溢する神の愛顧が私の身体にまで滲み入り、自分が活力を授けられ、新たな人間に変わったことを感じるのです。⁽²⁾

『カニシウス教理問答書』と呼ばれるイエズス会の教典が刊行されたのは、マインツにおける劇的な回心の十二年後である。一五四七年ローマ教皇パウロス三世は北イタリアのトリエントに各地の代表者を召集し、プロテスタントイイズムの進展に対抗する方策について協議させた。この会議ではカトリックの教義を鮮明にし、教会改革をみずから

推進すべきことが確認されたものの、ローマ教皇と神聖ローマ皇帝との対立もあつて数年間中断する。イエスズ会の雄弁家として一五四七年トリエント公会議に出席したカニシウスは、バイエルン、ウイーン、シチリア等々で布教と教育の事業を続けた。これらの地で彼がつぶさに知ったのは、新教勢力の広汎な浸透、なかでもルターの手で作られた『簡略カテキスム』の多大な影響である。こうしてカトリックの教義に忠実な教理問答書の必要性を痛感し、当初はイエスズ会の長老ジャック・レネーズにそれを進言した。^③ 彼に宛てたカニシウスの一五五一年二月十日付書翰には以下のとおり述べられている。

最近私はドイツの青年に向けたカテキスムについてローマと話し合いました。「中略」我らの教会の教育はながく停滞したままでありますが、それをドイツの子どもや素朴な民衆に容易に行き渡らせるため、導師がキリスト教の理論に関する教程を編まれるならば、いかなる営みよりも立派で有益な事業になるであろう、とクロード神父も申され、私も同感であります。この問題については当地におられる会士ともしばしば論議し、つぎのような合意に至りました。天賦の才能を導師が発揮されて、現在流布する大抵のカテキスムよりも一層適切な提要进行、子どもに教えるため執筆されれば、私たちにもほかの人々にも最大の助けになるであろう、と。多くのカテキスムは若い読者に害を与えるだけです。

こうした事業についてなんらかの着想を神が導師に鼓吹され、私たちの懇請を受けてキリスト教の教義の提要をここにお届けくださるよう、衷心よりお願い申し上げます。^④

ローマ教会においてこの提言は体系的な神学理論の編纂と並行し、結局カニシウス自身が青少年や民衆に向けた教典を作成することとなった。プロテスタティズムに反撃する妙手としてイエスズ会総長イグナティウス・デ・ロヨラとハプスブルグ王家フェルディナンド一世もカニシウスを支援し、トリエント公会議の最終決議を待ちきれず、一五

五五年に質素な装幀を施した八つ折判の書物として公刊される。DOCTRINE CHRISTIAMAE, Per Quaestiones tradita et in usum Christianae pueritiae nunc primum edita これが同書の題名であつて、ラテン語による全巻三八六頁に及び、執筆者カニシウスの氏名は記されていない。⁽⁵⁾こうした刊行の複雑な経緯はジェイムズ・ブロードリックによる評伝『聖ペテル・カニシウス』のなかで詳細に記述されているが、その思想的特質と政治的背景を察知するため、同書の序文として掲げられたフェルディナンド一世の勅令を訳出したい。因みにこの国王は十六世紀ヨーロッパを制覇したカール五世の引退に伴い、一五五六年神聖ローマ帝国皇帝として即位する。

どれほど深刻な紛乱と危険がキリスト教世界をあらゆる側面から揺れ動かしているかを、我らは大いなる悲哀をもつて凝視し、苦慮している。しかし、我らや敬虔な人々を苦悩させる主要な事由は、無視されるか、蔑視されるという不幸な状況にキリスト教が到るところで突き落とされたことである。我らの宗教こそ地上でもっとも神聖なものであり、一国におけるもっとも堅実で良好な装備および防壁と言える。それゆえに邪мана惡略の仕掛人である魔神、ローマ教会と善男善女に対するもっとも獐猛な敵である魔神は、眞の宗教に人類の安寧が大いに依存することを熟知し、いまや多年にわたりあらゆる場でキリスト教の布教を攻撃し、攪乱している。これほど大がかりな勢力と資源をもつて、これほど多くの術策や瞞着を駆使して、特定の地点を集中的に襲撃するのは、かつて見られない戦法である。かく申す瞬間にも魔神はその側近や部下に教示して、不信仰のあらゆる仕業を公刊された小冊子によつて播き散らし、押し弘めている。一方においてそれは従来の誤謬や宗派のためにローマ教会から遠のいた人々を勇気づけるものであり、他方ではローマ教会という静穩な陣営に留まる人々に、カトリックへの離反を唆かし、彼ら自身の陣営に加入させようと狙うものである。

どこでも大量に見出されるこれら小冊子のなかで、カテキスムと呼ばれる版本は、キリスト教を覆すのに多

大の影響を与えている。青年は真理の嚴肅さに姿勢を正す本性を持つが、こうした版本は簡潔さ、輕快さ、簡便さによつてあちこちで珍重され、經驗の乏しい純朴な彼らを大いに欺き、深刻なまでに腐敗させている。甘美さに惹かれてこれらを読めば、單純で不用心な者は次第に毒素を盛られ、真新しい危険な想念、あとではきわめて根絶し難い想念によつて無意識のうちに魂を墮落させていく。こうして間違つた理論の酵母にひとたび冒されるや、青年はカトリックの信仰をも、ローマ教会の教義と制令をも尊重しなくなる。

こうした事態において不敬虔な策動に打ち勝ち、聖なるカトリックの權能を維持するため、ローマ教皇の然るべき助言、警告、制令に則り、我らの義務としていかなることを為し遂げるのに欠けたわけではない。とはいへ、悪臭を放つ洪水が日々に拡がり、斬新な魅力を湛えた新たなカテキスムがなお統出している。單純な子どもや信じ易く視野の狭い若者や無学なおとなを対象として、大半の教師が認識したり、推測するよりも、はるかに大きな危険を伴いながら、それらは到るところに持ち込まれ、さまざまな学校で読まれ、解説されている。それゆへ重大な病患を扱う名医の手術、暴風に直面した名船長の采配が我らにも求められること、すなわち神の助けがある限り、なんらかの方策によつて現在のきわめて重大な危険を除去するか、すくなくとも鎮靜すべきことを決定した。

したがつて、教義と宗派の混乱に際して臣民をもつとも裨益するのは、カテキスムを学ばせる正統的な書物を執筆し、それらを公刊して国民に勧めることである、と熟慮のうえ我らは判断する。かくしてカトリックの教典を作成するため、正しい信仰と理論を保持し、神学的な学識と清廉・誠実な生活によつて広く知られた人物を我らは選定し、彼らが著述したものを検閲官に寄託した。このような手順を踏んだ以上、福音書とローマ教会の教えにすこしでも抵觸する書物が、我らの支配下にはけつして現れない、と確信を深めている。

上述の書物が全能である神の恵みによつて完成し、カトリック神学者の好意的な是認を受けたあと、我らは誠実なミハエル・チンメルマンに印刷を依頼し、法令によつてつぎのように命ずる。すなわち、神聖ローマ帝国および我らの世襲的な王国や領土において他のいかなる印刷業者・書籍販売業者にも、この書物を剽窃したり、印刷すること、またどこかで印刷された同書の写本を販売に供することが、初版刊行の日より十年間禁止される。いかなる口実によろうと、この禁令を犯す者は我らの著しい不興を招き、処罰として十マルクの純金ならびに書物全部の没収を科せられる。なお、そうした罰金の半額は我らの国庫に納められ、残りの半額はさきに述べた印刷業者に渡される。

したがって、ロウアー・オーストリーの諸州およびグリチア州において行政や司法を担当する人々は、つぎの事項を入念に監視されたい。すなわち、法令を軽視したり、蹂躪する者に対してどのような裁きがなされるかを見極め、我らの逆鱗と懲罰を避けようと望むかぎり、公的な学校においても、私的な学校においても、もっぱらこのカテキスムだけが教官、師匠、教師によつて扱われ、解説され、教えられるべきである。以上が我らの切実な心情と意志である。キリスト暦一五五四年八月、我らの首都ウィーンにて。⁽⁶⁾

無学な民衆への布教を重視するカニシウスは、原典の上梓後ただちにドイツ語版への訳業に入り、翌年それをベルギーのルーヴァンで刊行した。また、年少の生徒や無学な農民などより広汎な人々を念頭において、一層平易な教程『カトリック信者のための簡略教理問答書』を作成する。一五五八年ケルンで刊行されたこの冊子は、翌年ウィーンとアントワープで再版され、一五六〇年にはローマで、一五六一年にはホーランドのクラコフで出版される。こうしてローマ法王庁の推挙を得た『カニシウス教理問答書』は、イエズス会士の精力的な伝道ともあいまって世界的に普及し、十六世紀の末葉までに二百回の再版を重ね、十五の言語に翻訳された。⁽⁷⁾一六一五年にマシユー・ラダーは八

年前に逝去したカニシウスの伝記を書き、つぎのように評した。

ありとあらゆる民族の言語でカニシウスは語り始めた。ドイツ語、スラヴ語、イタリア語、スペイン語、ポーランド語、ギリシャ語、チェコ語、英語、スコットランド語、エチオピア語。そして、各地にいる我らの同志が伝えるところによれば、インド語と日本語もこれに含まれる。したがって、いまや彼こそ実際にあらゆる民族の教師として評価できる。⁽⁸⁾

(二)

一五九九年に通達されたイエスズ会の『学事規範』は第一の文書（管区長規範）の冒頭で、教育の基本的な課題を「創造主・贖罪主への知と愛を覚醒させる」ことと明記し、こうした視点で各国の管区長が系列下のコレージュを監視するように命じている。また、この文書では信仰および徳行を魂の救済にもっとも係わるものとし、「宗教的な訓練を施し、キリスト教の教義を教えるため、種々の規定を設けるよう」管区長に勧めている。⁽⁹⁾

コレージュ・ルイ・ルグランにおいても道德性の涵養が最大の課題とされ、神への信仰がその中心に置かれた。イエスズ会士が重視する国家への忠誠と社会規範の遵守、優れた臣民と有能な社会人の育成も敬虔な信仰なしにはあり得ない。⁽¹⁰⁾デュボン・フェリエ著『コレージュ・ド・クレルモンからリセ・ルイ・ルグランへ（一五六三—一九二〇）』によれば、サン・ジャック街における宗教教育も『学事規範』に依拠し、とくに『カニシウス教理問答書』を重要な教材として用いた。

神と宗教に関する基本的な知識を子弟に授けるため、神父たちはなによりもカテキスムを重視していた。そして、イエスズ会士はトリエント公会議に依拠するカテキスムを待ち切れず、独自の『カニシウス教理問答書』

を公にし、一五五四年から印刷行を始めた。この点に関してはイエスズ会士が公会議の成果を十二年先取りし、革新的な役割を果たしている。コレージュ・ド・クレルモンで採択されたのは、まさしく『カニシウス教理問答書』であり、長期にわたり高く評価され、一五九三年管区長クレマン・デュプユイのサン・ジャック街視察の折にも無二の教材として推奨されていた。勿論彼自身の筆になる提要 *Parvus catechismus catholicorum* であって、完全版 *Summa doctrine christianae* ではない。後者は神学者でもなく、高等学級に至らない生徒にとつてあまりにも精細だからである。⁽¹¹⁾

カテキスムによって子どもたちを導く試みは、ルネサンスの人文主義者エラスムスやジョン・コレットによってつとに試みられた。一五二二年頃からラテン語またはドイツ語で綴られたルター派の教理問答書が、プロテスタンティズムの浸透に大いに寄与したことは前項で述べた通りである。カルヴィンもまた一五三七年以降ふたつの教理問答書を編纂し、いづれもラテン語とギリシャ語に翻訳された。これに対抗してローマ教会の側では『カニシウス教理問答書』の成功に励まされ、エドモン・オージェが一五五七年に独自の『カテキスム』を執筆した。後者はカルヴィンの教理問答書に反論する形式で綴られ、体系的に論述された前者よりも年少の生徒に親しみ易いものであった。フランス語で書かれたオージェの著作は多くのコレージュで初等学級の教材として採択され、パリのある書肆は八年間に四万部売り捌いたと伝えられる。しかし、一五七二年にフランス管区長マチュウ神父が通達を発し、カニシウスの優位が決定的となる。⁽¹²⁾ デュボン・フェリエの著作により宗教教育の実際を一層仔細に眺めてみよう。

どの学年でも教官はカテキスムを教える責務を持った。人文学級の終りまで彼らは寄宿生にも通学生にも厳しく暗誦させ、ついでそののさまたな箇所を解説した。修辞学級になると、暗誦がなくなったが、講釈は続けられた。こうした解説は第三学級の終りまでフランス語でなされ、第二学級の最初からラテン語で進められ

る。毎週少なくとも一度、金曜か土曜に半時間続けられた。その際ボレ神父は講義室の扉を開け放ち、より多くの聴衆がより大きな恩沢に浴するよう配慮した。課外としても枝の主日、復活祭、聖霊降誕大祝日を除く日曜の午前に一五八七年以降カテキスムが教えられ、各週第二次の講義と位置づけられた。

一八世紀の初頭までパリでは毎日道德と敬神に関する講演会が催され、月曜日はルイ・ルグランに割り当てられた。一七二一年にこれを担当したのはクリネ神父である。

年に二回、クリスマス・イヴと聖霊降誕大祝日には礼拝堂に多数の生徒を集め、平素よりも荘厳に彼らの信仰心に公的に激励を与えた。この慣例は一五九三年からクレマン・デュブユイ神父によつて始められた。⁽¹³⁾

キリスト教の教義に係わる学習とともに、祈祷や告解のような宗教的所為についても『学事規範』は細密に指示している。たとえば、〈高等学級全教官に対する共通規範〉では「授業を始めるに先立つてひとりが祈祷を朗唱し、教官も生徒も脱帽してこれを傾聴する」よう命じられる。また、最小限月一度と定められた告解に関しても、たとえば〈初等学級教官に対する共通規範〉のなかで各々の生徒から「氏名と学級を記した切符を聴罪師は受け取り、だれが告解に來ないかを点検する」よう促される。⁽¹⁴⁾デュボン＝フェリエの考証はこうしたイエスズ会の規範がルイ・ルグランで忠実に履行されたことを示している。

神性を仰ぎ見る祈祷が日課でも授業でも休憩でも最初と最後を占めた。聖母や神への祈祷が沢山の写本に描かれている。日々のミサは必須のものであつて、すべての生徒がこれを受けるよう指示され、ローマ風の儀式で行なわれた。器楽はほとんどなく、歌唱のみであつて、とくにグレゴリオ聖歌が好まれた。コレージュのなかで礼拝堂、廊下、階段、教室、居室のどこでも生徒の視線が向く場所には、信仰の画像が壁に掛けられる。たとえば一五八七年にはイグナチウス、フランシスコ・ザビエル、ド・レイネスの肖像を掲げたと言われる。

推薦される書物がイエスズ会の文献とは限らず、マギオ神父は一五八七年にジェルソン、ドミニコ会士ルイ・グルナード、ガスブ・ロアルテによる『キリスト者の人生修業』を勧めた。

魂の真底から神への愛を喚起するため、神父たちは頻繁な告解と聖体拝領を生徒に促した。一五六二年と一五八七年には週一回の告解が過度とはされなかった。十六世紀から十七世紀にかけて月一回の告解は最小限度のものであった。生徒監、聴罪師、さらに彼らの助手がそうした教導を担当した。資格のある聴罪師を各々の生徒が選択し、告解聴取済証を手渡される。この紙片は生徒が自己の責務を果たしたことを証明した。

告解においてなにごとも周到に行われた。各々の生徒は「神と教会の教え、従順、純潔、清貧」を学んでいる。これらの事項に関して日々の行いはどうであったか。従順について欠けるところはなかったか。分別を失ったことはないか。包み隠しをしなかったか。勇気を失わなかったか。謙虚な態度を続けたか。目上の人を尊敬したか。前向きに考えたか。こうしてルイ・ルグランでは幼少のときから良心の微細な襞まで省みるよう個々の生徒を訓練する。十八世紀に降ってもマルタン・パリュ神父は罪を犯した者から恥辱、恐怖、怯懦、落胆を取り除くのに卓越していた。⁽¹⁵⁾

聖体拝領や心靈修業もコレージュの行事として導入されたが、生徒の宗教的自覚をとくに高めたのは『学事規範』でも示唆された聖母マリア信心会である。この組織は一五六三年まづイタリアのコレジウム・ロマーヌムで誕生し、一五六六年にはバリ最初の信心会がサン・ジャック街で組織された。信心会とは知性的・道德的にとりわけ優秀な生徒の集団であって、所属する学級、通学の形態、出身階層によっていくつかのグループに分かれる。彼らは信仰や德行に関する特殊な訓練を受け、他の生徒の模範とされた。彼らの活動は高く評価され、一五七五年には一五〇名の生徒が所属したと言う。⁽¹⁶⁾

ルイ・ルグランにおける政治教育はこうした宗教教育と密接に結びつき、絶対君主に忠実な臣民の形成を目的としていた。一六八五年ナントの勅令の廃止はイエズス会士を狂喜させ、サン・ジャック街では講演、銘文、詩歌、絵画によってルイ十四世の裁断を慶賀した。平素でも学園では国王をカトリックの一貫した守護者として崇拜し、王室の重要な出来事と歴代国王の事績が文芸や演劇や弁論のなかに採り入れられる。⁽¹⁷⁾ デュボン＝フェリエが描くように、もともと視野の広い教授すらカトリックの信仰と絶対君主への忠誠が一体であることを疑わなかった。

コレージュ挙げての歓呼を浴びながら、ボレは君主政を偉大な国民に相応しい唯一の政治形態であると称讃した。「生徒たちよ、と彼は熱弁をふるう。古今の共和主義者の運命を羨むことがないよう自制せよ。いかなる民主主義によっても得られぬものを、我らの王国は授けてくれる。」また、軍人を育成し、その子孫にまで報償を与えるのに君主政が共和政よりも適している、とボレは説明する。〔中略〕

なにごとを為そうと、国王は不可侵である、とボレは判断する。国王は神に従属するのであって、人民にではない。君主に対する臣民のあらゆる制御を彼は非難し、英仏海峡の北側で行われた権力の分立を糾弾する。ポーランドやヴェネチアで大貴族に特権を与える慣例も非とされる。ボレにとって貴族政治は君主への従属としか映じない。それは長子相続権に護られて、君主と人民の仲立ちを行うにすぎぬ。聴衆であるエリート層、フランス貴族の子弟を前にしてボレは訴える。財富によって豊かであるだけでなく、善行によって豊かであれと。相続権を持たぬ者にも地上ではつねに摂理が光り輝くように、彼らもまた祖先や家柄や先例に相応しいように、上流紳士はとりわけ三つの敵から身を護るべきである。無為、奢侈、決闘。とくに決闘は私的な争いという險悪な印象を与え、野蛮時代の最後の残存であり、王国から最良の命を奪い取るものである。

各人がそれぞれの地位にある。国王は国家の頭脳であり、貴族とブルジョアはその肢体である。これだけで

は充分でなく、愛国的な教育が加わった。国王がすべての臣民の頂点にいるように、フランスはあらゆる国々の頂点に位置する。ロッシユル、モンメリアン、クレモヌの占領、スペインにおけるフィリップ五世の成功、フランシユ・コンテおよびフランドルの占領、ドゥナンにおけるヴィラールの勝利。弱気な心を意気阻喪させる暗鬱な時局でも、ルジャイ神父は励ましの言葉と前向きな論議を見出した。フランスは永遠であり、我らの王国はけつして滅びない、と生徒に教えたわけである。⁽¹⁸⁾

(三)

コレージュ・ルイ・ルグランをはじめイエスズ会系学園で広く用いられた『カテキスム教理問答書』が、実際にどのような表現形式と教義内容を持つかを、ここで検討したい。すでに述べたとおり、一五五五年に刊行された DOCTRINE CHRISTIANNE に基づいて無学な民衆や年少の生徒のため、カニシウス自身の手によって簡略版が作成され、多くの言語に翻訳されている。筆者が閲読し、ここに抄訳するのはフランス国立図書館(パリ)に所蔵される一五八四年発行のフランス語版である。この書物は Catechisme ou instruction familière sur principales verites de la Religion Catholique (『カトリックの主要な原理に関するカテキスムまたは平俗教本』)との題名を有し、内表紙には著者名の Canisius (イエスズ会)、発行元の Esienne Michallet、刊行の一五八四年が明記される。なお、巻頭にはパリ大司教フランソワ・デアリリに対する発行元ミシャールの献辞、さらに国王の出版許可書抜粋が掲げられている。⁽¹⁹⁾ カテキスムは「まえがき」を含んで一二七頁にわたるが、本論は左記のように始まる。

第一章 信仰

問…キリスト教の教理第一章はなにを主題とするか。

答…信仰である。なぜなら、信仰なくして神に悦ばれることはありえない。

問…信仰とはなにか。

答…それは神からの贈物であって、神が人間を導いていく光明、書かれたものであろうと、書かれぬものであろうと、神が教会を通して啓示され、提起されたすべてを人間に確信させる光明と言える。

問…では、信仰するとはそもそもなにを意味するのか。

答…神が啓示したゆえをもつて、なんらかの事柄を揺るぎないものとみなすことである。

問…もうすこし説明して欲しい。キリスト者はなにを信仰すべきか。

答…ある事柄は一般的に信仰すべきであり、ほかの事柄は特殊的に信仰すべきである。

問…なにを一般的に信仰すべきか。

答…聖書に含まれる事柄すべて。

問…なにを特殊的に信仰すべきか。

答…カトリック信仰誓願の条項すべて。

問…暗黙のうちに示された事柄は信仰しなくてもよいか。

答…聖パウロは述べられた。伝統を信仰せよ、それは書かれざる神の言葉をなす、と。⁽²⁰⁾

『イエスズ会とフランス社会の教育』の著者フランソワ・ド・ダンヴィルは十六世紀後半に刊行された数種のカトリック教理問答書を紹介し、論理の柔軟さと思考力の喚起という観点ではオージェの『カテキスム』を高く評価している。しかし、やや権威主義ではあるが、一貫して正統的な教義を説き、系統的に理論を展開する『カニシウス教理問答書』が、より簡潔で明快で堅実な教典として広汎に用いられたと言う。⁽²¹⁾「第一章信仰」から「第二章希望」、第

「三章愛徳と戒律」と続いたあと、同書第四章の核心部分ではつぎのように教えられる。

第五章 キリスト教の正義 第二節 美徳と善行

問…キリスト者は悪から逃れ、罪を避けるだけで足りるか。

答…否である。なぜなら、良き実を結ばぬ樹木は切斷され、火中に投じられる、と救世主は申された。

問…では、どのような善をキリスト者はなすべきか。

答…神の前では正しく献身的に生き、人々の前では善行によつて己れの天職と使命を果すべきである。

問…善行にはどれほどの種類があるか。

答…三種である。すなわち、祈り、禁欲、施し。

問…善行はなにに役立つか。

答…聖書に誌されているとおり、人は信仰だけでなく、善行によつて正しき者となる。〔中略〕

問…物質的な慈善としてはどんなものがあるか。

答…七種ある。飢えた者には食物を与える。渴いた者には飲物を与える。裸の者には衣類を供する。囚れの者

には代償を払つてやる。病める者は見舞をする。巡礼には宿を貸す。そして、死んだ者は葬つてあげる。

問…そうした善行を実践して、なんの益があるか。

答…イエスは仰せられた。他を憐れむ者は幸いである、その人は憐れみを受けるであろう、と。

問…精神的な慈善としてはどんなものがあるか。

答…同じく七種である。罪人を矯正する。無知なる者に教える。迷える者に助言を与える。生ける者と死せる

者のため神に祈る。苦しむ者に慰めを与える。不当な仕打ちを耐え忍ぶ。侮辱的な行為を寛大に赦す。

問…そうした善行を實踐して、なんの益があるか。

答…他を憐れむ人は、みずからも憐れみを受ける。救世主が示された真福七端はどうであつたか。

一 幸いなるかな、心の貧しき者、天国はその人のものなり。

二 幸いなるかな、悲しむ者、その人は慰められん。

三 幸いなるかな、柔和なる者、その人は地を嗣がん。

四 幸いなるかな、義に飢え渴く者、その人は飽くことを得ん。

五 幸いなるかな、憐れみある者、その人は憐れみを得ん。

六 幸いなるかな、心の清き者、その人は神を見ん。

七 幸いなるかな、平和ならしむる者、その人は神の子と称えられん。

八 幸いなるかな、義のために責められたる者、天国はその人のものなり。⁽²²⁾

もとよりこうしたカテキスムの内容はカトリックの教義を凝縮したものであり、近代思想の発展とともに激しい攻撃を浴びるに至る。しかし、基本的な原理を平易な問答体で説明するという形式は、年少の子どもを預かる教育の場や無学な民衆に訴える啓蒙的な活動ではやはり効果的であつた。ルイ・ルグランで宗教教育を受けた代表的な思想家ヴォルテールとエルヴェシウスが、基礎的な理論を問答体で綴る一文を遺したことは注目に値する。両者の著作に踏まれる該当部分をここに抜粋し、換骨奪胎したカテキスムに感覺論あるいは唯物論の自然観と社会観がいかに組み込まれるかを考察したい。一七六四年に上梓されたヴォルテール著『哲学辞典』には四つの教理問答、「中国人のカテキスム」、「主任司祭のカテキスム」、「日本人のカテキスム」、「園芸家のカテキスム」が含まれる。第二のものもヴォルテールの日本観を知らううえで興味を感じるが、ここではもつとも長文である「中国人のカテキスム」について冒頭

の問答を訳出してみよう。

中国人のカテキスム

孔子の弟子クー・スーと中国皇帝グネン・ヴァンに属するルー国の王子コウ殿下との対話 紀元前四一七年
コウ ……天を崇拜せよ、と人々は言うが、どう理解すればよいか。

クー・スー ……私たちの目に見える天ではありません。天は大気にほかならず、すべて地球から蒸発したもので構成されています。蒸発物を崇拜するのは愚かです。

コウ ……それぐらいで驚きはしない。人々はもつと大きな痴愚を行っているように思われる。

クー・スー ……確かにそうです。だが、殿下は統治する身分であられます。賢明になってください。

コウ ……天や惑星を崇拜する民族が多く存在するではないか。

クー・スー ……惑星も私たちの地球と同種類のものです。たとえば、月の砂や泥に向って私たちが拝跪するように、月も地球の砂や泥に向って拝跪するのです。

コウ ……天と地とか、天に昇るとか、天に値すると人々が言うとき、なにを意味するもか。

クー・スー ……途方もない痴愚を述べています。天などありません。惑星はそれぞれ繭のように大気に包まれ、太陽の周りを回転するのです。太陽はその周りをつねに回遊する惑星群の中心にいます。高いところも低いところも昇るも降るもありません。月の住民が地球に昇るとか、地球に値したとか申せば、大層奇妙に思われるでしょう。天に値したい、と私たちが言うのも無意味な言葉です。あたかもそれは大気に値したい、龍座に値したい、空間に値したいと申すのと同じです。²³

ヴォルテールに私淑した哲学者エルヴェシウスにあつてはカテキスムの影響が一層明確である。つとに彼は一七五

八年に刊行された『精神論』第三章で、政治や社会に関する勉学を幾何学の定理に倣って系統的に進めるよう提案した。⁽²⁴⁾この着想は一七七三年に公刊された遺著『人間論、人間の教育とその精神的諸能力』でより具体的に例示される。同書の「第十篇第七章 人間の道德教育」においてエルヴェシウスはみずから提示するカリキュラムと宗教的な教理問答の形式的な類似性をつぎのとおり明言する。

少年期に正義に関する明快な観念をいかに授けるか。私には判っている。しばしばわめて愚劣な信仰の教えすら、宗教的なカテキスムを手だてとして子どもに記憶させるのを見れば、公正という教えと原理は、日々の経験によって有用性と真実性が立証されるものであり、道德的なカテキスムを手だてとして同じように記憶させることが可能である。⁽²⁵⁾

こうして『人間論』の結論的な部分でつぎの世代に向けて独自のカテキスムが開陳される。十九頁四一項目にわたるこの教理問答は基本的な原理を広汎な階層に教えるという目的ではイエスズ会のカテキスムに類似し、感覚論あるいは唯物論の貫徹という内容ではカトリックの教義と根源的に相容れない。⁽²⁶⁾啓蒙思想の主流としてエルヴェシウスは感性的な存在としての人間から出発し、社会的結合と社会契約の成立、労働と所有の発展、道德と法律の意義へと理論を展開する。

エルヴェシウス著『人間論』第十篇第七章

人間の道德教育

道德に関するもつとも明快で厳密な観念を培うには、いかにすればよいか。つぎのような問答を行なうがよい。

〔問〕 人間とはなにか。

〔答〕 理性的動物である、とひとは言うが、感性的動物、か弱い動物、繁殖する動物であることは確かと思われる。

〔問〕 感性的動物として人間はなにをするか。

〔答〕 苦痛を避け、快楽を求める。そして、このような不断の追求と回避が自己愛と名づけられる。

〔問〕 それでは、か弱い動物として人間はなにをするか。

〔答〕 ほかの人間と結合する。あるときは己れより強い動物から身を護るために、あるときは獣と闘つて、生活の資を得るために、またあるときは食物として有用な獣を捕獲するために。そして、ここから狩猟と漁撈に関するあらゆる契約が発生する。〔中略〕

〔問〕 農耕の必要からなにが生ずるか。

〔答〕 所有の必要が生ずる。

〔問〕 所有の契約はどの範囲にまで及ぶか。

〔答〕 己れの身体、思考、生命、自由、財産まで。

〔問〕 所有の契約がひとたび結ばれると、その結果どうなるか。

〔答〕 契約を蹂躪する者、すなわち泥棒、人殺し、狂信家、圧政者への刑罰が現れる。このような刑罰を廃止すれば、人々の間のあらゆる契約は水泡に帰する。他者の所有を侵害しても、罰せられなければ、人々はただちに戦争状態に入る。このとき人々の間のあらゆる結合は解消し、獅子や虎に出逢うように、彼らはたがいに逃れ合う。〔中略〕

〔問〕 勿論正義が国を支配せねばならぬ。そして、正義は法によつて国を支配すべきである。だが、すべての法が同じ性格を有するか。

〔答〕 そうではない。それらのなかにはいわば不易の法がある。不易の法なくして、社会は存続できないか、少くとも安寧に存続できない。所有に関する基本法もこの種のものである。

〔問〕 その種の法を無視すること許される場合があるか。

〔答〕 あり得ない。ただし、祖国の存亡に係わる稀有の事態は別である。

〔問〕 そのとき法を無視できる権利はどこから発するか。

〔答〕 一般利益から、すなわち侵すべからざる唯一の法からである。

人民の安寧こそ、至上の法であれ！

〔問〕 至上の法のまえでは、すべての法が沈黙すべきか。

〔答〕 そうである。トルコの軍隊がウイーンに進撃するとき、立法者は同胞の所有権を一時的に制することができ。すなわち、迫り来る敵軍を飢えさせるため、作物を取り払い、穀倉を焼き尽すことが許される。

〔問〕 法は神聖であつて、改正できないか。

〔答〕 最大多数の人々の福祉に反するときは、改正すべきである。⁽²⁷⁾

第七節 コレージュ・ルイ・ルグランの教育と

哲学者エルヴェシウスの学生時代（その六）

—— 哲学教育と新しい思想への関心 ——

（一）

信仰心の涵養を至上の目的とするイエズス会系コレージュでは、すべての勉強と訓練が神学に従属するように定められた。学業の中心として神学は在学中の四年間に及び、専任の教授にはトマス・アキナスを信奉する学者二名が選ばれた。また、三カ年にわたる哲学の講義では、論理学、自然学、形而上学を順次扱い、トマスの著作とともにアリストテレスの理論に依拠するよう指示された。⁽²⁸⁾『学事規範』を参照したい。

〈スコラ神学教授規範〉

【一七五】トマス・アキナスに従うべきこと

我らの学園はスコラ神学、聖トマスの理論に全面的に従い、彼を我らの教会博士として仰ぐ。また、学生を可能なかぎりスコラ神学を学ばせるよう全力を尽す。ただし、最高のトマス主義者と称する人々すら、しばしば距離を置くのであるから、もはや距離を置けないほど、聖トマスに密着すべきでないことも留意されたい。我らの学園がトマス主義者自身よりも強くトマス・アキナスに密着することは、妥当ではない。

【一七八】信仰と敬虔への配慮

教えるにあたって教授は信仰を強め、敬虔さを培うようまず配慮すべきである。聖トマスが明確には論じていない問題に関しては、ローマ教会の見解や旧来の伝統に合致しない事柄、あるいはなんらかの仕方で堅固な信心を揺がすような事柄を教えてはならない。なお、信仰する万物の証となる事由は、慣習に合うという理由だけで承認されてきたとしても、反駁してはならぬことも重要である。また、恒常的で強固な原理から引きだされぬかぎり、軽々しく新しい事由を案出すべきでないことも同様である。⁽²⁹⁾

〈哲学教授規範〉

【二〇七】目的

自然諸学とおなじく自由学芸も知性を神学に向かわせ、神学の十全な習得と実践に役立ち、神学と同一の目的を目指すものであるから、然るべき周到な配慮をもって教授はこれらを担当し、すべての事象において神の栄誉と栄光を真摯に仰ぎ、学生たち、主として我らの学生たちに神学への準備を施し、創造主を認識する願いを彼らのうちにとりわけ喚起すべきである。

【二〇八】アリストテレスに従うべきである。だが、どこまで。

多少重要な事柄に関しては、アリストテレスから逸脱してはならない。ただし、大学によって普遍的に承認されている理論と異なる箇所に着目し、とくにその箇所が正統的な信仰に反する場合は別である。また、アリストテレスやほかの哲学者の論議がこうした信仰に相反するときには、ラトラン公会議の綱領に従い、全力を挙げてそれらを論破するよう専念されたい。⁽³⁰⁾

コレリジュ・ルイ・ルグランにあっては聖トマスの權威は絶対的であり、彼の解釈によってアリストテレスの理論

も説明された。アリストテレスがキリスト教徒ではなく、アヴェロエスなど異端的な註釈者に惑わされないためである。聖トマスの著作をめぐる一五八三年いわゆるトマス主義者とイエズス会の間に対立が生じ、サン・ジャック街の神父たちを苦慮させた。十六世紀後半に哲学を担当した二八名に関してデュボン・フェリエは、哲学教授の平均年齢は神学教授のそれよりもかなり若く、過半は二十六歳から三一歳であったと言う。担当した期間も大抵は一年ないし二年と短く、八年から九年に及ぶのは例外的であった。また、彼らの多くは文学を教えた経験を有し、少数ではあるが物理学や神学を担当した者もいた。ほかの分野の教授と比較してこれらの人々については遺された学問的業績が貧弱であり、自由な思考への禁避がその原因であろうと、デュボン・フェリエは推測する。ルイ・ルグランにおける哲学の講義がこのような条件のもとでどうして活発で魅力的なものになり得よう。⁽³¹⁾

論理学、道徳、形而上学の講義は勿論ラテン語で教えられた。そのほとんどを書き取らせる。一五七九年にすら多すぎると巡視の神父が感じて、「書き取りは最小限に」と申された。神学においても教官は即興的には語らず、講義ノートを読み上げた。実際に「哲学朗読者」、「論理学朗読者」、「形而上学朗読者」と呼ばれていたのである。一切の脱線は禁止された。臨床医学の実習がそうであり、神学の重要な講義もおそらくそうである。その教育内容が膨大であるため、時間の配分が算定された。どの学年も次年度に積み残してはならなかった。

すべての学生がアリストテレスの教典を携え、「朗読者」がまずそれを読み上げる。この朗読は神経質なままに入念で厳密であった。ギリシャ語の原典を理解できないことは、救い難い基本的欠陥とされた。朗読に続いて註釈に入る。「授業」の独自性はここに存する。聖トマスによつて解釈されたアリストテレスの思想が、必要な場合にはトレットやフォンセカの説明をも加えて、同じ主題を論じたり、関連した問題を扱う哲学者た

ちの思想と比較された。これらの問題は明確に提示され、範囲を定め、区分して論議される。相反するすべての見解が秩序と段階をつけて論駁される。そうした仕方ですべての論証が配列され、考量され、比較され、連結される。一連の三段論法が推論を導き、結論から結論へ、ついには目標の帰結へとすすむ。厳密さ、明確さ、透明さ。無味乾燥な散文性を捨てても、哲学言語によって得ようと望んだものがここにある。想像力を喚起したり、感性に訴えることなく、知性を服従させることが大切なのである。心情を満たすことよりも、精神を納得させることが必要なのである。⁽³²⁾

一六三七年レネ・デカルトは寄寓先のオランダで『方法序説』理性を正しく導き、諸々の学問において真理を求めるための『』を公刊した。イエズス会系列の名門コレージュ・ド・ラフレーシユを卒業した彼は、「世間という大きな書物」を読むために二一歳のときから異国への旅に出た。かつてラフレーシユでデカルトを教え、当時校長の地位にあったエティエンヌ・ノエル神父は、感謝の意を籠めて『方法序説』を献呈されている。とはいえ、やがてヨーロッパ思想史を革新するこの書物に、カトリックの教義を根底から揺がす要素が秘められていることは、イエズス会士によっていち早く感知された。会士のひとりピエール・ブルダンが同書を駁する最初の公開討論をコレージュ・ド・クレルモンで組織し、荒削りな論駁と脅迫的な言辞によって謙抑なデカルトを激怒させた。⁽³³⁾『方法序説』の刊行がサン・ジャック街に与えた衝撃と影響についてデュボン・フェリエはつぎのように記述する。

権威という原理に代えてデカルトは吟味という原理を定立した。アリストテレスの伝統に抗して批判的精神を、旧来のスコラ的形式主義に抗して自由な理性を彼は対置する。デカルトに關してイエズス会士は、人間としての彼を尊重し、学者としての彼を尊敬したが、哲学者としての彼、危険思想の布教者としての彼には闘いを挑んだ。警鐘を最初に鳴らしたのはイエズス会士である。この改革者に対してコレージュ・ド・クレルモン

ではふたりの神父が反対の立場を公に表明した。ひとりは哲学および数学の教授ブルダン神父であり、他は一六三五年から一六三九年まで校長であつたディネ神父にほかならぬ。ブルダンは個々の授業や自身の著述や公的な活動においてデカルトを激しく弾劾し、一六四〇年と一六四四年には白熱した論争を喚起した。比較的清静なディネはより一層の知性と老練さを示す。神父は小論文を執筆して反駁し、その草稿をデカルトに渡した。デカルトもまたこれに応える。かつての恩師に深い敬意を払い、彼らの影響力を熟知しているデカルトは、そこで好意を受ける機会を見逃しはしないからである。一六三七年、一六三八年、一六四四年に書かれた彼の書簡がそれを立証する。コレージュ・ド・ラフレージュにおいて彼の自習監督教官であつたひとり、ついにはコレージュ・ド・クレルモンで校長を勤めるひとり、すなわちノエル神父にとりわけデカルトは期待する。ほとんど無駄であつた。デカルトの精神がながく存続することを予感して、彼の生前も死後もイエスズ会士は攻撃を続ける。実際にそれは生き残つた。一六七四年ないし一六七五年からオラトワール会士マルブランシュ神父は、デカルト主義を一層推進し、当代の上流社会を制覇するよう決意した。信仰がいささかでも損なわれることなど意に介さず、彼は理性に關して無限の権能を要求した。

ライバルや宿敵である他の学園と同様に、コレージュ・ルイ・ルグランでも新しい思想が知らぬ間に侵入した。哲学の十七世紀から十八世紀の初頭にかけてそれらが哲学の講義において教えられた。受講者のノートや公開された学業からしてもこうした事実に疑念はない。この学園と同じくルアン、アミアン、カーン、アランソンなどのコレージュでもデカルトとマルブランシュは狂信者を現出させた。一七〇五年ルイ・ルグランには熱烈な信奉者のひとりとして若手の学寮監アンドレ神父がいた。学寮監や生徒を周囲に集めながら、彼が校庭を横切り、アリストテレスや聖トマスや彼らの門下を嘲弄し、デカルトとマルブランシュを讃美する様子を人々

は見たのである。省察すべきはあたりの著作のみである、とアンドレは断言した。彼らの理論を危険なもの、異端的なものと非難するのは、恥ずべき業であつて、貧弱な頭脳の論法に過ぎない。禁書目録に記載したとしても、「どのような理由によつていかに押し止めるか」と反問できる。こうして次第に生徒たちはスコラ学やその方法に嫌惡を抱くようになった。

多くのイエズ会士がアンドレ神父の唱導に感染していった。サン・ジャック街では一七二四年までロド・デュ・テルトル神父が、また一七二四―二五年までアルスクエ神父とフルーリ神父がそうである。

したがつて、厳しく取り締まることが必要となつた。デカルトとマルブランシュが提起した三十の命題が一七〇六年イエズ会総会と総長ミケランジュ・タンブリーニ神父によつて糾弾される。ただし、一七三二年には新しい総長フランソワ・レッツによつて一七〇六年の弾劾を修正することが求められた。この間にルイ・ルグランではアンドレ神父をはじめとするデカルトリマルブランシュ信奉者が処罰され、追放や恭順を命ぜられる。哲学教授の地位を新しい理論への賛同者にけつして委ねてはならなかつた。なおまた、そうした理論を非難しないという理由だけで、イエズ会から追放されることもありえた。一七二一年にアンドレ神父はバスチーユに投獄され、その後バリ管区で最後のマルブランシュ主義者よりもながく存命した。⁽³⁴⁾

ヴォルテールとエルヴェシウスの恩師であるシャルル・ポネは、新学期や行事に際してしばしば講演を行い、文学、芸術、思想などの分野における当代の話題について論じた。ラセルヴィエールによる詳細な評伝はそれらの概要を数多く収録しているが、新しい思想をとくに論じたのは、一七三八年二月三日ポイニヤック枢機卿の主宰のもとになされた講演である。いかに傑出した人物であろうと、彼の作品のすべてを無条件に讃美してはならない、と演壇のボレ神父はまず強調する。「人間の理論に対しては、従順すぎぬよう用心せよ、神に由来する教義に対しては、従順さ

に欠けぬよう用意せよ。」当代のさまざまな事例を示しながら、傲慢な天才が甚だしい錯誤に陥ること、反対にローマ教会の教えによって人間精神の安寧が保たれることを彼は説き明かす。⁽³⁵⁾

透徹した英知を持つ天才、近代哲学の祖である彼「デカルト」は、多くの卓越した賢者によって開拓された道程を敢えて放棄し、案内人も師匠もなく、自己のほか建築士にも頼らずに、新たな世界体系、新たな天文学を造り出し、数学の新道を提示するとともに、いまだ知られざる推論方式を発見した。そして、あらゆる方面から激烈な攻撃を浴びると、応答を欠かさず、それらはながく神託のようにみなされた。空虚な熱狂である。想像にすぎないもの、確かというよりも精妙さと評すべきあらゆる事柄、誤謬と隣り合せにあるか、誤謬へと導く提言が、彼の著作には實際いかに多く含まれることか。自然を覆っていたヴェールを彼は一方の手で取り払い、誤謬を包み隠すヴェールを無意識のうちに他方の手で用意したと言えないであろうか。

人間の魂の奥底まで洞察した精緻な探究者マルブランシュ。「人間においては神のみが作用し、神においてのみ人間はすべてを見る」とこの人物が宣言するに至ったのではないか。

喜劇作家の王者であり、他の追隨を許さぬモリエール。古代を真似ようと、自己だけを源にしようと、けっして模倣できないモリエール。平民の粗野な笑いを求めて、この人物が上流紳士の響壁をしばしかったではないか。⁽³⁶⁾

(二)

名誉革命の思想家ジョン・ロックは一六九〇年に『人間悟性論』を公刊し、イギリスで以後十年間に四版を重ねた。プロヴァンスで生まれたピエール・コストは新教徒として祖国を追われ、亡命地オランダで思想家のベールやロック

と知り合つた。勤勉で聡明な彼は、『人間悟性論』をフランス語に翻訳し、優れた註解を付して一七〇〇年に初版を、一七二九年には改版を上梓する。この訳書はオランダ、フランス、スイス、イタリア、ドイツなど大陸諸国において広く読まれ、パリでは學術雑誌『文芸共和国新報』や『メモワール・ド・トレヴー』に書評が掲載された。ロック著『統治二論』の仏訳はすでに一六九一年アムステルダムで刊行されているが、一七一〇年には政治理論を含む『ロック著作集』もフランス語に訳された。一七二二年に『ベルシャ人の手紙』を出版し、啓蒙運動の口火を切つたシャルル・モンテスキューは、その八年後ロンドンに滞在し、ピエール・コストと親交を結んだ。一七四八年に完成する彼の名著『法の精神』には、イギリス旅行の成果が含まれるとともに、『統治二論』の影響が認められる。³⁷⁾

ヴォルテールに関しては、傑出した俊秀でありながら、ルイ・ルグラン在学中にデカルトやロックから啓発されたとの証左はない。一七一年に哲學級を卒業した彼は、駐オランダ大使の秘書として挫折したあと、自由思想家の結社テンブルで詩作を披露するようになった。撰政オルレアンを誹謗した罪で一七一七年バスチーユに投獄されるが、その翌年悲劇『エデップ』の成功によつて文学的地位を確立する。イギリスでは名譽革命を推進したトリー、ウィッグ両党の間で次第に主導権争いが激化し、一七一四年王位継承問題で優位に立つたウィッグ党が政權を掌握した。トリー党の領袖ヘンリー・ボリングブロックは新王ジョージ一世とウィッグ党に追われ、翌年パリに亡命する。この地でフランス女性ヴィレット侯爵夫人と再婚した彼は、みずから歴史書や哲學書を執筆するとともに、自由な雰圍氣の学会を通してロックへの関心を深めていく。³⁸⁾ ルネ・ボモー著『ヴォルテールの宗教』には両者の親交が過ぎるよう

に述べられている。

一七一九年からヴォルテールはパリの英国街へ頻繁に行つた。トリー党の党首であり、当時亡命していたボ

リングブロック卿を訪問したのである。このような顯官の前で彼は自作の叙事詩を朗読し、讃辭を頂戴した。そして、ポリングブロックが語るのを拝聴して、幅広い深い教養の持主であることを悟つた。政務や遊樂のなかにあつても、この人には「すべてを学び、すべてを記憶する方策が具つている。」イギリスの詩もフランスの詩もイタリアの詩も知つていた。歴史についてもエジプト古代史をイギリス史と同じ程度に。〔中略〕ポリングブロックからヴォルテールに宛てた一七二四年六月二七日付書翰が、『ヴォルテール書翰集』の編纂者によつて発見されている。この人こそヴォルテールにとつて哲学への先導者であつた。理性を開発するよう、ポリングブロックが青年を励ます様子がそこに読み取れる。また、この人がヴォルテールに読書指導を行う様子も読み取れる。デカルトとマルブランシュについて無知ではないけないこと、ふたりとも哲学者であるよりもむしろ詩人であること、『真理の探究』は「この世でもっとも美しい謎々」と思われることを彼に教える。ニュートンが渦動の体系を粉碎したことも伝えられる。ポリングブロックはロックを読むようヴォルテールに勧めた。この手紙にはとりわけ威厳が感じられる。書き手の貴族が文章に重みを与えるからである。このトリー党の指導者、かつて言論の力によつて議會を制覇した指導者にヴォルテールは、ケケロに対するのと同様に感嘆した。⁽³⁹⁾

こうしてヴォルテールは一七二四年からコストのフランス語訳によつてロック著『人間悟性論』に取り組んだ。翌々年名門貴族との悶着によつて再度バスチーユに投獄され、まもなく国外退去の処分を受けてイギリスに亡命する。その地で彼は立憲政治の確立や思想・学問の發展をつぶさに眺め、文学者のスウィフト、詩人のポウプ、哲学者のバークレー、神学者のクラークと知り合つた。一七三三年にまずロンドンで、その翌年アムステルダムで刊行された『哲学書翰―イギリス便り』は、亡命生活における研鑽の成果であり、フランス国内にも広く流布されて、啓蒙運動の本格化を導く契機となつた。⁽⁴⁰⁾この書物においてヴォルテールはベーコンやニュートンの業績を紹介するとともに、ロッ

クの哲学を高く評価した。

ロックよりも賢明で方法的な精神、厳密な論理家はおそらくこれまで存在しなかったであろう。だが、彼は偉大な数学者ではなかった。煩瑣な計算や無味乾燥な数学的真理に彼は身を委ねることができなかった。精神が感じるものをすぐには示さないからである。それでも幾何学の助けなしに幾何学的精神を持ちうることを、彼ほど美事にだれも証明できなかった。ロック以前に偉大な大哲学者たちは人間の靈魂がなんであるかを、実定的に決めていた。しかし、それに関して彼らはなにも知らず、当然のことながら、各々が相異なる見解を抱いていた。〔中略〕

これほど多くの論客が靈魂のロマンを描いたあとに、ひとりの賢者が現われ、謙虚にその歴史を書いた。あたかも優れた解剖学者が人体の発条を説明するように、ロックは人間の理性を人々に開陳した。随所で彼は自然学の松明を援用する。ときには取えて肯定し、ときには取えて疑いを向ける。認識しないものをいきなり定義する代りに、認識したい事柄を順次検討する。彼は生まれた瞬間に子どもを取り上げ、悟性の発達を一步一步追求する。彼は禽獣と共通な要素と禽獣より優る要素を見分ける。彼はなによりも自身による確証、みづからの思惟の認識に耳傾ける。⁽⁴⁾

サン＝ランベール執筆の小伝によれば、哲学者エルヴェシウスは早くもルイ・ルグランに在学する時点で『人間悟性論』から多大の影響を受けた。当初は鈍重で反抗的で出会った彼は、ポレ神父の個人的な指導によって文芸や思想に関心を抱く学生へと成長したのである。体育や競技をも組み入れ、名譽心の喚起を重視するイエズス会の教育方針も、多感な若者を激励するのには効果的であった。⁽⁴²⁾『エルヴェシウスの生涯と作品』には学園時代の後半がつぎのように描かれる。

初めて栄光を授けられたことが、名譽心をさらに高めた。コレージュにおける公開競技で表彰された若いエルヴェシウスは、稱讃を得られるあらゆる事柄に優等であろうと欲した。舞踏と劍術を最初苦手としたが、やがてこれらふたつの部門で傑出する存在となった。後年彼はオペラ座においてジャヴィエという偽名で仮面をつけて踊り、拍手喝采を浴びる。

彼の競争心はあらゆる部門に及んだが、嫉妬心に変わることはけつてなかった。ライバルである後輩を愛し、彼らの信頼も得た。厳しい教師への反発や面白半分の氣持から悪戯を企むときも、彼が秘密を守ってくれと、後輩は信じて疑わなかった。

コレージュになお在学する時期に、エルヴェシウスは『人間悟性論』を知った。この書物が彼の思考に革命をもたらした。彼はロックの熱烈な門弟となった。ただし、プラトンの門弟であつたアリストテレスと同じく、師匠の發見にみずからの發見を彼は付加した。

ロックに鼓吹された哲學的精神をエルヴェシウスは法律の研究に適用した。このときより彼は人間の本性と幸福に対する法律の關係を究明した。⁽⁴³⁾

修辭學級の学生エルヴェシウスがロックに傾倒するに至る経緯は詳らかでない。イエスズ會系列のコレージュにおいてルネサンス以降の近代思想が厳しく排除されたことはさきに述べた。ヴォルテールやエルヴェシウスに敬愛されたボレ神父は、同時代の文学や哲學を論じる視野を持ち、ロックの著作への言及が学生に機縁を与えた可能性は高い。しかし、エルヴェシウスの卒業とは同じ時期にあたる一七三八年の講演でも、ボレはデカルトの思想を本質的には許容していない。むしろデュボン・フェリエの考証によるとおり、禁避された書物が学園に持ち込まれ、ベーコンやロックへの共感が密かに学生たちの間に拡がったことも考えられる。

サン＝ランベールが記述するとおり、ロックの認識論をエルヴェシウスは法制や道德の分野に適用した。二十世紀初頭に詳細なエルヴェシウス評伝を上梓したアルベール・カーンは、こうした社会的関心の深さがひとつには彼の家庭的環境に根ざすことを指摘している。すなわち、伝染病の名医という父祖の家業が、貧民や弱者に接する機会を彼に与え、社会の現実と改革を考える方向に導いたと言う。⁽⁴⁴⁾ ボリングブロックに啓発されたヴォルテールの場合と同じく、ロックの思想に対する彼の傾倒はコレージュの教育や教師の指導によるのではなく、家族の影響やさまざまな人々との交遊のなかで醸成されたと思われる。

こうしてクロード＝アドリアン・エルヴェシウスは一七三七年にコレージュ・ルイ・ルグランの修辭學級を卒業し、父母の希望によって財務家への道を進むこととなった。まず彼は父方の叔父タルマンクールに預けられ、ノルマンディのカーンで農場経営の訓練を受ける。⁽⁴⁵⁾ 徴税総請負人と王妃大膳職という職務を経て、彼が主著『精神論』を公刊するのは、その二十年後であった。まさしくこの著作でロックの哲学が社会理論と道德理論に適用される。コレージュ在学中に経験した「思考の革命」をエルヴェシウスが終生保持し、発展させたことを、遺作『人間論』の巻末に付せられた補論が端的に示している。

『人間論』補論 第一章 ロックの見解と私の見解の類似性

精神は私たちの観念の集積にすぎない。

ロックは言う。私たちの観念は感官を通して得られる、と。この原理に私の見解も依拠する。すなわち、私たちの精神は後天的に獲得される、と結論できるわけである。

精神を自然の純一な賜物とみなすこと、いかなる器官から発するかも不明のまま、それを特異な身体組織の所産とみなすことは、哲学における神秘的形質を想起させる。それは証左なしに信じることであり、偶発的な

判断にすぎない。

精神の優劣が感官の精粗によるものでないこと、相異なる身体組織を有する人々が、同程度の情念や観念を持ちうることを、経験も歴史も私たちに教える。

こうした見解はロックの原理によつて覆されるどころか、むしろ確証される。教育が私たちの実像を造つたこと、授けられる教育が等しければひとしいほど、人々の間にはより多くの類似性が生じること、したがつてどのドイツ人もアジア人との間よりもフランス人との間に一層多くの類似性を持ち、フランス人との間よりも他のドイツ人との間に一層多くの類似性を持つことは、ロックの原理が立証するところである。

以上のような事実に従つて私はこの著作『人間論』を執筆した。私の原理とロックの原理の間に認められる類似性が真理を把握した証左になると考え、確信をもつて本書を公衆に開示したい。(中略)

経験と理性が私の原理に対する唯一の審判である。本書で真理が論証されたとすれば、こうした原理が遅滞なく普遍的に採択されてよい、と私は結論する。真理が行き渡るのはつねに遅々としている。吸血鬼など存在しないと証明されたあとも、ハンガリー人はながく迷信をやめなかつた。古くからの迷妄は歳月を重ねるうちに尊重すべきものとなる。したがつて、自分の見解を披瀝すれば、普通の人々でも幼時から抱いてきた各自の見解を放棄するなどと、私は自惚れてはいない。

内心では原理の誤りを確信しながら、一般に信じられているという理由、公衆の見解に闘いを挑みたくないという理由で、どれほど多くの人々が旧来のものを支持していることか。真なるものを提示されたとしても、誠実な真理愛好者は僅少であり、真理の探究と把握に専念できる人物は稀である。我こそ真理の使徒であると敢えて表明するには、みずからの幸福を一点に集中せねばならない。

新たな見解が真理であることを、そもそもだれに感知させようと配慮するのか。少数の若人にはかならぬ。世間に入るにあたって、彼らは変え難い信念など持たず、もつとも理に叶うものを選ぶ。哲学者が執筆するのは、これら若人と後世に向けてである。風変わりに思われ、ほとんど知られてもいない真なる見解が、共通の一般的な見解になる瞬間を、哲学者は未来という遠景のなかにのみ認める。後世の称讃では心が充たされず、当代の榮譽を渴望する者は、真理の探究から身を引くがよい。そうした人の眼に真理が映じないからである。⁴⁶

【付記】

以上でもってエルヴェシウスの学生時代に関する記述は完結し、『ヨーロッパ』における私の論文の掲載も今回で終止符が打たれる。もともと本稿は『精神論』の執筆と弾圧を中心として書くつもりであったが、家系を調べるうちに古代ローマ時代まで遡ることになり、哲学者エルヴェシウスの伝記としてはいまだ門口に留まっている。しかし、彼がコレージュを巣立つの期を同じくして、私自身が定年退官を迎えるに至った。貴重な時間と乏しい研究費をさいてこの学術雑誌の編集や刊行に尽力され、十一回にわたって冗漫な論稿の掲載を許して頂いたことを、ヨーロッパ文藝選修教官の方々に衷心より感謝したい。

〈註〉

本稿における主要な文献に関しては、下記の略号を使用する。(原則として大文字は著者の頭文字を、小文字は署名の頭文字を表わす。)

甲 哲学者エルヴェシウスの著作

- Hel : Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'esprit*, Paris, Durand, 1758.
 HelM : Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'esprit*, texte revue par Jacques Moutaux, Paris, Faeyard, 1988.
 Hh1 : Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Homme, de ses facultés intellectuelles et de son éducation*, Londres, Société typographique, 1773, 2 volumes.
 HhM : Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Homme, de ses facultés intellectuelles et de son éducation*, texte revue par Geneviève et Jacques Moutaux, Paris, Fayard, 1989, 2 volumes.
 Hol : Claude-Adrien HELVETIUS, *Oeuvres complètes*, ed. par L. La Roche, Paris, P. Didot l'aîné, 1795, 14 volumes. (Georg Olms Verlagbuchhandlung, Hildsheim, 1984)
 エネニメ: エルヴェシウス著『根岸国孝訳『人間論』明治図書 一九六六年。
 乙 その他の主要な文献
 Bs : James BRODRICK, *Saint Peter Canisius*, Chicago, Loyola Press, 1998.
 Ch : Ian CUMMING, *Helvetius, His Life and Place in the History of Educational Thought*, London, Routledge et Kegan Paul Ltd., 1955.
 Chc : J. CRETINEAU-JOLY, *Histoire religieuse, politique et littéraire de la Compagnie de Jésus*, Paris, Jacques Lecoiffe, 1859, 4 volumes.
 Del : Gustave DUPONT-FERRIER, *Du Collège de Clermont au Lycée Louis le Grand (1568-1920), la vie quotidienne d'un collège pendant plus de trois cent cinquante ans*, Paris, De Boccard, 1921, 3 volumes.
 Drs : *Ratio studiorum, plan raisonnée et institution des études dans la Compagnie de Jésus*, édition bilingue latin-français, présentée par Adrien Demoustier, Paris, Belin, 1997.

Kh : Albert KEIM, *Helvétius, sa vie et son oeuvre*, Paris, 1907. (Slatkine reprints, Geneve, 1970)
Se : Jean François de SAINT-LAMBERT, Essai sur la vie et les ouvrages d'Helvétius. dans *Hol*, tome I, pp.1-176.
Sp : J. de la SERVIERE, *Père Charles Porté S. J., un professeur d'Ancien régime*, Paris, Oudin, 1899.

- (1) *Bs*,pp.28-38. *Chc*,tome I, pp.143.
- (2) BRAUNSBERGER, *Beati Petri Canisii Epistulae et Acta*, vol.i, pp.76-77, quoted in *Bs*, pp.36.
- (3) *Bs*,pp.84-88, 107-127, 222-224. *Chc*,tome I, pp.205-212, 266-269.
- (4) *Bs*,pp.224-225.
- (5) *Bs*,pp.225-235. *Chc*,tome I, pp.266-267
- (6) BRAUNSBERGER, *Beati Petri Canisii Epistulae et Acta*, vol.I, pp.752-754.
- (7) *Bs*, pp. 235-237
- (8) Mathew, quoted in *Bs*, pp.230-231, quoted in *Bs*, pp.230-231.
- (9) *Drs*, pp.72, 89.
- (10) *Del*, tome I, pp.231, 266.
- (11) *Del*, tome I, p.266.
- (12) François de DAINVILLE, *Les jésuites et l'éducation de la société française, la naissance de l'humanisme moderne*, Paris, Beauchesne, 1939. tome I, pp.162-165.
- (13) *Del*, tome I, p.267.
- (14) *Drs*, pp.103, 153.
- (15) *Del*, tome I, pp.269-270.
- (16) *Del*, tome I, pp.266, 273.
- (17) *Del*, tome I, pp.273-274
- (18) *Del*, tome I, pp.275-276.

ラセルヴィエール著『シャルル・ボレ神父』にもルイ・ルグランにおける政治教育に関してほぼ同じような記述がなされて

- い。Sp. pp. 362-366.
- (19) Cc. titre.
- (20) Cc. pp.5-6.
- フランス語原典では教理問答の個々の部分に根拠として聖書の該当箇所が欄外に逐一明記されている。たとえば、訳出した第一章の最初の答については「ヘブル人への手紙」第十一章六および「マルコ伝福音書」第十六章十六が挙げられる。ただし、あまりに煩雑にわたるため、本稿ではそれらを省略した。
- (21) DAINVILLE, *op. cit.*, pp.166-172.
- (22) Cc. pp.119-125.
- (23) VOLTAIRE, *Dictionnaire philosophique*, Paris, Garnier, 1967, pp.64-65.
- カテキスムの名は付していないが、デイドロの『ダランベールの夢』三部作も同じ範疇のものと云えないだろうか。こうして基本的な理論を問答体で理解させる啓蒙書としては、たとえばサン＝シモンの『産業者の政治的教理問答』まで系譜を考へることもできる。
- (24) *Hol.*, pp. 274-282. *Hem.*, pp.249-256. *Hol.*, tome III, pp.215-232 エネニメ、一六四頁
- (25) *Hol.*, tome II, pp. 644-645. *Hm.*, tome II, p.903. *Hol.*, tome XII, pp.100-101. エネニメ、一六五―一六九頁
- (26) エルヴェシウス著『人間論』の社会理論と道德理論、さらには教育改革の一環としての道德カテキスムに関しては左記の論文を参照して頂きたい。
- 拙稿「エルヴェシウスに対するルソーおよびデイドロの哲学・教育論争について―フランス啓蒙思想における認識・道德・能力の諸問題―（その十二）」『愛知教育大学研究報告』第四十輯（教育科学）、一九九一年。
- (27) *Hol.*, tome II, pp. 645-653. *Hm.*, tome II, pp.903-908. *Hol.*, tome XII, pp.101-110.
- (28) *Drs.*, pp.76, 124-125.
- (29) *Drs.*, pp.115-116.
- (30) *Drs.*, p.124.
- (31) *Del.*, tome I, pp.176-178.
- (32) *Del.*, tome I, pp.181-182.

- (33) Adrien BAILLET, *La Vie de Monsieur Descartes*, Paris, Daniel Horthemels, 1591, partie I, pp.280-282, partie II, pp.72-73.
- (35) *Sp*, pp.181, 192-193.
- (36) *Sp*, pp.193-194.
- (37) Robert SHACKLETON, *Montesquieu, a Critical Biography*, Oxford, Oxford University Press, 1961, pp.131-134, 282-288.
Ch, pp. 19, 25-27.
- (38) René POMEAU, *D'Arouet à Voltaire*, pp.81, 118-120, 143-144, 161, 195. *Ch*, p.19.
 なお、『告白』第一部によれば「一七三六年頃ジャン・ジャック・ルソーはサヴォア公国の溪谷レ・シャルメットで、持病の療養を兼ねて自己教育に専念し、デカルトやマルブランシュの著作とともにヴォルテール著『哲学書翰』を読んだ。この田園生活の記述全体は真偽をめぐる大きな謎を含んでいるが、本稿ではこれに立ち入らない。」
 Jean-Jacques ROUSSEAU, *Les Confessions*, dans ROUSSEAU, *Oeuvres Complètes*, Paris, Gallimard, 1959, tome I, p.237. ジャン・ジャック・ルソー著、桑原武夫訳『告白』岩波書店、一九六五年。上、三三八頁。
- (39) René POMEAU, *La Religion de Voltaire*, Paris, Nizet, 1974, pp.93-95.
- (40) René POMEAU, *D'Arouet à Voltaire*, pp.321-331.
- (41) VOLTAIRE, *Lettres philosophiques ou lettres anglaises*, Paris, 1951, pp.61, 63.
 (cf. ヴォルテール著、林達夫訳『哲学書翰—イギリス書翰』岩波書店、一九五一年。八〇、八一、八三頁。)
- (42) 宮廷貴族や富裕なブルジョアの子弟を預かるルイ・ルグランでは、社交の手段として音楽と舞踏を習得することを奨励した。デュボン・フェリエは左記のように述べる。
 「音楽がなければ、舞踏は陰気なものになる。音楽だけが動きと歩みの調和に精密さを加味し、五感のヴェールを取り除く。悲哀と陽気、優しさと激しさ、夢見心地と狂乱怒涛。音楽を伴った舞踏は躍動的な絵画であり、目と耳と精神に響き、語りかける。ルイ十四世の個人的な趣味で宮廷において愛好され、アカデミーの貴頭に奨励される以前に、舞踏がコレージュ・ド・クレルモンでは一六三八年から上演された。肝心であるのは、『学事規範』で禁じられたおどけた所作に墮落しないこと、また〈魔神の傑作だ〉と評するイエスズ会士の怖れを消散させることである。舞踏は社交界でとくに必要とされるもの、すなわち物腰の優美さと姿態の典雅さを訓練の仕上げとして生徒に体得させた。」 *Dcl*, tome I, pp.293-291.
- (43) *Se*, dans *Hol*, tome I, pp.6-8.

- (44) *Kh*, p.14.
- (45) *Se* dans *Hol*, tome I , pp.8-9.
- (46) *HhI*, tome II, pp. 729-728. *HhM*, tome II, pp.947-949. *Hol*, tome XII, pp.147-152.